

ヨハネによる手紙第一3章4-6節 「罪を犯している者」

1A 律法への違反 4

1B 全ての者

2B 神に対する反逆

2A キリストの現れ 5

1B 罪を取り除くため

2B 罪のない方

3A 罪に相いれない方 6

1B 罪を犯さない者

2B キリストを見たこともない者

本文

ヨハネの手紙第一 3章を開いてください。私たちのヨハネ第一の学びは、3章3節まで来ました。今晚は、4-6節をじっくりと見ていきます。「⁴ 罪を犯している者はみな、律法に違反しています。罪とは律法に違反することです。⁵ あなたがたが知っているとおりに、キリストは罪を取り除くために現れたのであり、この方のうちに罪はありません。⁶ キリストにとどまる者はだれも、罪を犯しません。罪を犯す者はだれも、キリストを見たこともなく、知ってもいません。」今晚は、「罪を犯している者」という題名でお話したいと思います。

ヨハネは、2章28節から、キリストが現れることについて話していました。キリストが現れる時に、御前で恥じることはないように、キリストの内に留まっていなさいと勧めています。留まるとは、共に時間を過ごす、一緒にいるということです。そして、キリストが現れる時には、3章2節によると、キリストに似た者になるということです。キリストが清い方であられるので、この方が現れるのを待ち望む者たちには、その希望によって自分を清めるということを見てきました。

4節から6節には、すでに知っていること、つまり、キリストが既に現れたことについて話しています。将来のキリストの現れから、過去にキリストが現れてくださったことを話しています。そして、それは罪を取り除くためであって、キリストに留まる者は罪を犯して生きていることはできない、とされています。私たち教会の者たちは、どうしても、誰が救われたかどうか、ということで物事を推し量ってしまいます。それは、過去にイエスを自分の救い主として信じ、受け入れたかどうか、で判断しています。けれども、今、キリストの内に生きているのかどうか、ということについては、蔑ろにしてしまいがちです。罪を犯していながら、私はキリストを知っていると言えるのか？ということです。そういった偽りに対して、使徒ヨハネは第一の手紙でよく私たちに教えてくれています。

1A 律法への違反 4

もう一度、4 節を見ましょう。「**4 罪を犯している者はみな、律法に違反しています。罪とは律法に違反することです。**」

1B 全ての者

ヨハネは、罪とは何かについて定義していますが、その前に、「**罪を犯している者はみな**」と言っています。「みな」という言葉を使って、そこには差別がないことを、人にとって罪を犯していても、その責任を免れるということではなく、誰であっても罪を犯していれば、律法に違反していると宣言しています。

第一の手紙が、反キリストの教えを語る者たち、偽教師たちに対する警戒であることを思い出してください。彼ら、グノーシス主義者らは、啓示、光が与えられて、それを知ることによって救われるとしていました。その知識こそが大事であり、その知識を持っている者たちが神を知っていることでもあります。そこに、罪についてどのように対処しているのか、ということが抜けてしまっています。ですから、罪を犯しているのに、その光としての知識があるから、そんなの関係ないということが暗黙の了解になっていたのです。

巷で言われる、異端やカルトの教祖は、このような人々が多いですね。自分は神と真理に直接つながっているから、私から聞きなさいと言いながら、女性信徒に淫乱を犯したり、豪華な生活をしたりします。そして、権威と呼ばれているものに対しては、非常に高慢なことを語り、冒瀆的になります。ペテロ第二の手紙とユダの手紙で、彼らの時代に既に、そのような偽教師たちがいたことを教えています。「Ⅱペテ 2:12-14 この者たちは、本能に支配されていて、捕らえられ殺されるために生まれてきた、理性のない動物のようです。自分が知りもしないことを悪く言い、動物が滅びるように滅ぼされることになります。13 彼らは不義の報酬として損害を受けるのです。彼らは昼間から飲み騒ぐことを楽しみとしています。彼らはしみや傷であり、あなたがたと一緒に宴席に連なるとき、自分たちのだましごとにつけるのです。14 その目は姦淫に満ち、罪に飽くことがなく、心が定まらない人たちを誘惑し、心は貪欲で鍛えられています。彼らはのろいの子です。」

このような極端な例でなくとも、知識を持っているとされている人々は、あたかも免罪されるかのような雰囲気があります。これだけのことを知っているから、として知識優先でその人が霊的であるかどうかを推し量り、罪がないがしろにされるのです。そういった雰囲気、使徒ヨハネはメスを入れているのです。

2B 神に対する反逆

ヨハネは、「**罪とは律法に違反することです**」と明確に定義しています。神の命じておられることに逆らうことが、罪です。聖書には、他の箇所でも、罪の定義がいろいろあります。「ロマ 14:23b な

ぜなら、それは信仰から出ていないからです。信仰から出ていないことは、みな罪です。」信仰によって行わず、疑いながら行っていたらそれが罪であるとパウロは言っています。「ヤコ 4:17 こういうわけで、なすべき良いことを知っていながら行わないなら、それはその人には罪です。」やるべきことを行わなければ罪であるということです。そして、ここでは、神の律法に違反することが、罪であるとしています。言い換えると、「神に逆らっている」ということです。

とかく人間は、性格の弱さであるとか、過去に置かれていた環境のせいであるとか、罪というものを曖昧にしていまいがちですが、聖書ははっきりと、これは「神に対する反抗、反逆」なのだということなのです。アダムが、食べてはならないと命じられていたのに、それを食べたということ、神に逆らったのです。イザヤは、預言の冒頭で、はっきりと神への反抗なのだということを語っています。「1:4 わざわいだ。罪深き国、咎重き民、悪を行う者どもの子孫、墮落した子ら。彼らは【主】を捨て、イスラエルの聖なる方を侮り、背を向けて離れ去った。」自分が何よりも、神に対して罪を犯したのだ、神に背いて、酷いことをしたのだという悟りが必要なのです。

罪を罪として、神に対して逆らっていることとして取り扱うことを避けているから、キリストの十字架の意味も薄れてしまいます。パウロが、律法の違反のためにキリストが身代わりに死なれたことを語っていますが、神の処罰を受けたことをはっきりと語っています。「ロマ 8:3 肉によって弱くなったため、律法にできなくなったことを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪深い肉と同じような形で、罪のきよめのために遣わし、肉において罪を処罰されたのです。」

2A キリストの現れ 5

罪が律法に違反することであることを踏まえた上で、5 節でヨハネはこう言っています。「⁵ あなたがたが知っているとおりに、キリストは罪を取り除くために現れたのであり、この方のうちに罪はありません。」

1B 罪を取り除くため

使徒ヨハネは、「あなたがたが知っているとおりに」と言っているように、これを知っているから救われている、神から生まれているのですが、「キリストは罪を取り除くために現れた」ということです。犯した罪を見過ごしてくださった、赦してくださったということもありますが、私たちの良心から根こそぎ、罪を取り除いてくださったのです。バプテスマのヨハネは、イエス様が来られたのを見て、「ヨハ 1:29 見よ、世の罪を取り除く神の子羊」と呼びました。

律法の下では、牛や羊のいけにえが献げられていました。「血を流すことなければ、罪の赦し」はないからです（ヘブル 9:22）。けれども、いにえを携えて礼拝をしに来ても、それでも罪の意識がなくなるどころか、罪が思い出されてしまいます。祭司も、毎日立って、いけにえを繰り返し献げても、それで罪が取り除かれることはなかったのです。けれども、キリストは違います。ヘブル書の

著者はこう言っています。「10:12-14 キリストは、罪のために一つのいけにえを献げた後、永遠に神の右の座に着き、13 あとは、敵がご自分の足台とされるのを待っておられます。14 なぜなら、キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって永遠に完成されたからです。」神ご自身の御子が、そのからだをいけにえとして献げてくださったので、永遠のささげ物なので、それで、どんなに罪を犯していたとしても、それらを全て、一切合切、取り除いてくださったのです。

ですから、この方の流された血によって、私たちは表面的に罪が覆われたのではなく、心から、良心から清められ、御霊によって新しくされた心で神に従うことができます。「ヘブル 10:22 心に血が振りかけられて、邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われ、全き信仰をもって真心から神に近づこうではありませんか。」私たちに、罪の性質はこのからだに残っています。ヨハネも第一の手紙で、そのことを話していて、「1:8 もし自分には罪はないと言うなら、私たちは自分自身を欺いており、私たちのうちに真実はありません。」と言って、罪の性質がなくなったということではありません。「2:1 私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。」と言って、罪がないというなら、ヨハネは犯さないようにするためです、と書かないでしょう。そうではなく、キリストの血潮によって、御霊によって心が洗い清められたので、罪を犯さなくてよい自由が与えられた。神に従う心と思いが与えられたということです。自分が御霊に従うなら、肉の欲望を満たすことがなくてもよくなります。

私たちはとかく、イエス様が罪と戦ってください、罪に打ち勝ってくださいことを忘れてしまいます。キリストを信じるといいながら、罪との戦いの真剣さを忘れてしまうことがあります。「ヘブル 12:2-4 信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをもものともせず、十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。3 あなたがたは、罪人たちの、ご自分に対するこのような反抗を耐え忍ばれた方のことを考えなさい。あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないようにするためです。4 あなたがたは、罪と戦って、まだ血を流すまで抵抗したことはありません。」

2B 罪のない方

そしてヨハネは、「**この方のうちに罪はありません。**」と断言しています。この方は、罪を負われました。けれども、罪は犯されませんでした。この方は罪人とみなされました。けれども、罪人ではありませんでした。肉体を持っておられたので、肉の弱さを持っていて、あらゆる誘惑を受けられました。けれども、罪を犯しませんでした。「ヘブル 4:15 私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯しませんでした、すべての点において、私たちと同じように試みにあわれたのです。」このことは、驚くべきことです。グノーシス主義者らが、信じられなかったのは、この真理だったのです。肉というものは悪でしかないと決めつけていた彼らは、イエスが肉体を持っていたのに、悪を行われなかったということが受け入れられなかったのです。善の中だけで生きていたのであれば、肉体は持っていなかったはずだとして、仮現説、仮に現れた、肉体ではなく、

バーチャルで現れたとしたのです。

しかし、この方は肉体を持ちながら、100%人間でありながら、それでも罪を犯されませんでした。この方のうちに罪がなかったのです。聖霊によってマリアがイエスをみごもって、その時からこの方のうちに罪がなく、罪なき生涯を全うされました。罪人に近づかれながら、罪と交わることはありませんでした。罪人と食事をして、罪人が悔い改めるも、ご自身が罪に関わることはなかったのです。そうやって、ご自身の清さが人々に伝わって行ったのです。

3A 罪に相いれない方 6

ですから、次の結論に至ります。「**6 キリストにとどまる者はだれも、罪を犯しません。罪を犯す者はだれも、キリストを見たこともなく、知ってもいません。**」

1B 罪を犯さない者

キリストの内に罪はないのですから、キリストにとどまる者はだれも、罪は犯さないのです。ここで、罪を一度も犯さなくなるということではないことをもう一度、繰り返します。そうではなく、継続的に、習慣的に、犯していないということです。キリストと罪は相いれないものだからです。キリストと交わっているながら、罪と交わることはできないのです。キリストと罪を一つにしてしまうからです（Ⅰコリ 6:15-17 参照）。

異教世界の中で、不道德は当たり前とされていた社会や文化の中に生きていたキリスト者たちに、パウロは何度となく警鐘を鳴らしています。コリントの教会に対して、こう言いました。「Ⅰコリ 6:9-10 あなたがたは知らないのですか。正しくない者は神の国を相続できません。思い違いをしてはいけません。淫らな行いをする者、偶像を拝む者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、10 盗む者、貪欲な者、酒におぼれる者、そしる者、奪い取る者はみな、神の国を相続することができません。」ガラテヤの人たちに対して、こう書きました。「5:19-21 肉のわざは明らかです。すなわち、淫らな行い、汚れ、好色、20 偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、21 ねたみ、泥酔、遊興、そういった類のものです。以前にも言ったように、今もあなたがたにあらかじめ言うておきます。このようなことをしている者たちは神の国を相続できません。」肉の欲だけでなく、分派や争いなど、高慢についても肉の行いとして数えられていますね。そして、エペソの人たちに対しても、こう書いています。「5:5-6 このことをよく知っておきなさい。淫らな者、汚れた者、貪る者は偶像礼拝者であって、こういう者はだれも、キリストと神との御国を受け継ぐことができません。だれにも空しいことばでだまされてはいけません。こういう行いのゆえに、神の怒りは不従順の子らに下るのです。」そして、コロサイの人たちに対しても（3:5-6）、テサロニケの人たちに対しても語っています（Ⅰテサ 4:4-8）。

律法の行いによって義と認められると教えている、偽りの教え、ユダヤ主義とも呼ばれますが、

そういった律法主義も問題ですが、律法は無くなってしまった、肉に任せるままに従ってよいのだとする無律法主義の偽りも流行していました。それで、ピリピの人たちに対してパウロが次のように警鐘を鳴らしています。「ピリ 3:18-19 というのは、私はたびたびあなたがたに言ってきたし、今も涙ながらに言うのですが、多くの人がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。19 その人たちの最後は滅びです。彼らは欲望を神とし、恥ずべきものを栄光として、地上のことだけを考える者たちです。」このように、キリストに留まる者は、罪から離れた生活を送るのです。

2B キリストを見たこともない者

そしてヨハネは、はっきりと「**罪を犯す者はだれも、キリストを見たこともなく、知ってもいません。**」と言っています。キリストを知っていると豪語するグノーシス主義者らに対して、見たこともなく、知ってもいないと断言しています。ここに、私たちの考える知識の違いがあります。キリストの知識は、そのまま行いに直結します。この方を知るということは、心にへりくだりと従順をもたらし、変化を与えます。福音書に出て来る、イエスに出会った人々を見てください。悔い改めへと導かれています。取税人ザアカイは、かすめとったものを返しますと、イエス様に会っただけで変えられました。

ですから、キリストを見たのだとして、霊的体験を吹聴し、キリストを知っていると知識を振りかざしていても、神に命じられたことを行っていないのであれば、実はそれは真っ赤な嘘で、キリストを見たこともなく、知ってもいないということなのです。山上の垂訓における、イエス様の警告を思い出しましょう。「マタ 7:21-23 わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。22 その日には多くの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言し、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの奇跡を行ったではありませんか。』23 しかし、わたしはそのとき、彼らにはっきりと言います。『わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れて行け。』」主よ、主よ、と言っても、不法を行っているのであれば、この方のことを全く知らないのです。この方が全く知らないと言っています。人格的に知らない、のです。イエスの名を使って、預言をしても、悪霊を追い出し、奇跡を行っていても、です。

そして、知っている、知っていないということは、御父のみこころを行っている、行っていないということにかかっています。私たちがいかに、神を知ること、キリストを知り、留まるということが、いわゆる知識ではなく、霊的にこの方と出会う、交わるということなのかを知らされます。みなさんは、毎朝、デボーションを持っているでしょうか？聖書の学びだけで、知識的に満足していないでしょうか？主から聞き、この方に会うということ、そして従順に従うということ、これが大事なのです。